

書 評

『はじめて学ぶ生命保険』

松澤 登 著

保険に関する研究または学修には、それがわれわれの社会生活または経済活動における「生き物」についての探究として、現実に行われている保険取引を理解することが欠かせない。そして、ある分野についての初学者にとって初めて手にする書物との出会いが、その後の研究または学修に対する意欲を決めるともいえよう。本書は、「はじめて学ぶ」と題されているとおり、これから生命保険を研究または学修しようとする者、本書「はじめに」において筆者自ら述べているように、「生命保険業界に興味のある学生や生命保険会社をはじめとする金融業界に就職したての人」を対象としている。

本書は全5章で構成されている。第1章は「保険とは何か」で始まり、その必要性と保険の存在



生命保険契約は、契約者となる者の申し込みという意思表示と保険者となる者のそれに対する承諾という意思表示とが合致して成立する契約である。他方で、約款という商品を消費者が保険者から購入するという側面が生命保険取引にはある。

ともに金融機関と位置付けられている生命保険会社の規制内容が、第4章のテーマである。そして最終章である第5章では、生命保険業の今後の展開、または生命保険会社の業務に影響を与える地球的環境の激変に伴う生命保険の近い将来の姿をダイナミックに取り扱っている。例えば、SDGsやESG投資は現代的課題であり、他の事業または他の企業とともに取り組むことが急務な先進的テーマである。

生命保険の法的理解の副読本に利用を

以上、本書の全体構成を概観したが、ここでは生命保険に関する特別の一般人の感覚から捉えたい、そして初学者にとつて整理することに手間がかかるポイントを二つピックアップして評論してみたい。それらは、生命保険募集と生命保険会社の業務規制についてである。

【評者】 梅津 昭彦 (新潟大学法学部教授)

平易でありながらも鋭く切り込んでいる。そして、「勧誘活動」または「募集」において特に注視されるべきことは、生命保険の募集に従事する者が顧客と生命保険会社との間で生命保険契約の締結に至るプロセスにおいて適切な保険契約を締結すること、その生命保険募集に際しては、生命保険業の位置付けをより深く理解できるようにしよう。生命保険会社が営むことが許される業務には、生命保険の引受業務に加え、他にそれに付随する業務、そして限定的に許される他の業務がある。ただし、本来の業務である生命保険の引受業務に影響を与え、結果的に保険契約者または保険金受取人の諸権利に不利を及ぼすようなことがあってはならない。そこで、保険契約者等のために生命保険会社の財務の健全性確保が肝要であるところ、本書では、「標準準備金の積立て」「ソールベンシマージン比率規制」、そして保険数理人の役割について、それぞれ具体的な事例を用いて丁寧に解説している。

中でも、生命保険会社が保険契約者から收受する保険料の内訳と、その会社内での積立て、将来の支払いに備えたソールベンシマージンの計算について本書の記述は明解であり、保険者の支払い能力に対する規制内容、生命保険会社が收受する保険料と責任準備金との関係、単純ではあるが的を射た図および表を用いて丁寧に解説している。また、生命保険会社が行う投資を扱う記述部分でも、初学者が生命保険に関する研究または学修を進める上で頼りとなる。評者の専門の観点から述べるならば、生命保険に関する法的および業法上の理解の副読本として本書が利用されることが期待される。それは、著者である松澤氏のこれまでの研究に基づく法学的センスを本書の随所に見て取れるところにそのよ

うな期待を抱かせる。さらに、評者の専門ではないが、本書は、生命保険を切り口とした金融論に誘う格好の書物であると評価できるのではないだろうか。その意味で本書は、筆者が対象としている人たちが「生き物」である生命保険を研究し学修しようとすることに貢献する、または今一度初心に返って生命保険を探求しようとする者にとつても理想的な指南書であると考えられる。(A5判/254頁、保険毎日新聞社刊、21年5月25日発行、税込2640円)